

ARI TA KO TA BE
有田・小田部

第26集

—有田遺跡群170次・173次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集

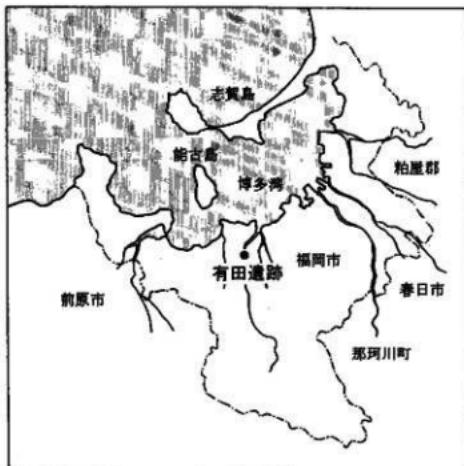
1996

福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE
有田・小田部

第 26 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第473集



遺跡調査番号 9251, 9338
遺跡略号 ART-170, 173

1996

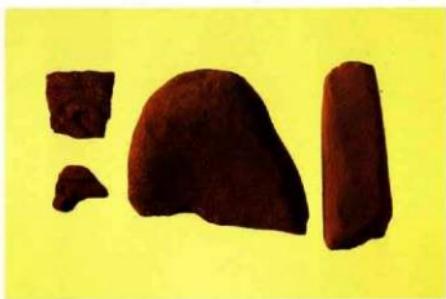
福岡市教育委員会



第170次調査地点（空撮）



SX内1号, 2号土壤（南から）



SK04, SK06 出土遺物

序

福岡市は北方に広がる玄海灘の海を介し、彼地との人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利、歴史を踏まえ現在の福岡市は「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」をめざし町づくりを進めているところです。教育委員会においては、こうした町づくりの一環になりうる文化財保護と活用に努めています。やむなく、多様な開発で消滅してしまう埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存を講じて後世に残そうと考えています。

今回の発掘調査は、市内の遺跡群の中でも重要視されている有田・小田部遺跡群で行なわれ、170次の調査数を数えるようになりました。調査の積み重ねによって遺跡の姿も点から面へとより具体的になり、成果も大きなものとなっていました。発見されたものは旧石器時代から近世まで幅広く、人々の生活が連綿と営まれてきたことを物語っています。とくに縄文時代の貯蔵穴、近世の火葬墓は注目されるものです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際し御協力いただいた建設工事業の関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

- 1 本書は福岡市早良区小田部3丁目179-1外(170次)と小田部3丁目189-1外(173次)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成4年度を古武、平成5年度を荒牧が担当し、本書の執筆は荒牧が行なった。
- 3 本書掲載の実測図、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され公開、活用していく予定である。

凡　　例

- 1 本書掲載の遺構図、方位は真北である。
- 2 掲載図面のアミ掛け、色刷り部分については各個別に説明を加える。
- 3 本書使用の遺構名は溝をS D、掘立柱建物跡をS B、堅穴住居跡をS C、土壌をS K、柱穴をS Pとする。番号は各年度毎に通して付したが、平成5年度調査の主要遺構は100番台からに記し直した。

170次

遺跡調査番号	9251	遺跡番号	ART-170
調査地地籍	早良区小田部3丁目179-1外	分布地図番号	82-A-1
調査対象面積	2,150m ²	調査実施面積	2,118m ²
調査期間	930105~930331 930610~931020	事前審査番号	4-1-528

173次

遺跡調査番号	9338	遺跡略号	ART-173
調査地地籍	早良区小田部3丁目189-1外	分布地図番号	82-A-1
調査対象面積	280m ²	調査実施面積	280m ²
調査期間	930916~931020	事前審査番号	4-1-528

本文目次

I	はじめに	
1.	調査の経過	1
2.	調査 体制	1
II	位置と環境	
1.	地形	2
2.	既応調査から	2
III	第170次調査の記録	
1.	調査の概要	5
2.	調査の方法	5
3.	層序	5
4.	遺構と遺物（縄文～弥生時代）	9
(1)	住居跡	
SC01		9
SC18		11
SC114		12
SC15		12
SK99		12
SK13		12
(2)	土壤	
SK04		13
SK05		13
SK06		13
SK106		14
SK21		15
SK107		15
SK105		16
SK201		16
(3)	掘立柱建物跡	
SB115		19
SB113		19
SB116		20
5.	遺構と遺物（中世以降）	
SX110		20
SD109		26
SD108		26
SB117		26
SK09		28
SK17		28
SD111		28
SX110出土石斧		28
IV	第173次調査の記録	
1.	調査区の位置	29
2.	調査の概要	29
3.	土層	30
4.	遺構	30
	SE150	30
V	小結	32

挿図目次

図1 有田・小田部台地の旧地形図(昭和初期) (1/5,000)	P 3	図20 Pit20出土土器実測図(1/4)	P 18
図2 第170次第173位置図の既定測点(1/100)	P 4	図21 SB115実測図(1/80)	P 19
図3 調査区北東部壁面の土層断面(1/80)	P 5	図22 SB113実測図(1/80)	P 19
図4 主要遺構配置図(1/500)	P 6	図23 SB116実測図(1/80)	P 20
図5 SC01実測図(1/60)	P 9	図24 SX110実測図(1/80)	P 22
図6 SC01出土遺物実測図(1~6 1/3, 7~11 1/2)	P 10	図25 SX110内1号、2号上層実測図(1/20)	P 22
図7 SC18実測図(1/60)	P 11	図26 SX110H出土物実測図(21, 22 1/3, 23~27 1/4)	P 24
図8 SC114実測図(1/60)	P 12	図27 SD108出土物実測図(1/3)	P 26
図9 SC15実測図(1/60)	P 12	図28 SB117実測図(1/80)	P 26
図10 SK04~06火葬坑(1/40)	P 13	図29 Pit100山上銅鏡拓影(1/1)	P 27
図11 SK04~06出土遺物実測図(1/3)	P 14	図30 SK09, 17実測図(1/40)	P 28
図12 SK106, 21火葬坑(1/40)	P 14	図31 SK09出土遺物実測図(1/3)	P 28
図13 SK107実測図(1/40)	P 15	図32 SX110出土石斧(1/3)	P 28
図14 SK107出土遺物実測図(1/4)	P 15	図33 第173次調査地点位置図(1/400)	P 29
図15 SK105実測図(1/40)	P 16	図34 第173次全体図(1/200)	P 29
図16 SK201実測図(1/40)	P 16	図35 調査区南壁土層断面(1/40)	P 30
図17 Pit 2 実測図(1/20)	P 17	図36 SE150火葬坑(1/60)	P 31
図18 Pit 2 出土土器実測図(1/4)	P 17	図37 SE150山上遺物実測図(1/3)	P 31
図19 Pit20実測図(1/20)	P 18	図38 検出時出土遺物実測図(1/3)	P 31

写真目次

写真1 第170次調査区全景
写真2 調査区北半部全景(南から)
写真3 調査区東斜面完掘状況(北から)
写真4 平成4年度調査全景(西から)
写真5 調査区北東部完掘状況(南北から)
写真6 SC01完掘状況(西から)
写真7 SC18完掘状況(西から)
写真8 SC114完掘状況(南東から)
写真9 SK04, 05完掘状況(西から)
写真10 SK06土層断面(北から)
写真11 SK04~06出土遺物
写真12 SK106完掘状況(南から)
写真13 SK107完掘状況(北西から)
写真14 SK105完掘状況(南北から)
写真15 SK201完掘状況(西から)

写真16 Pit 2 完掘状況(南から)
写真17 Pit 2 完掘状況(南西から)
写真18 SB113完掘状況(南西から)
写真19 調査区北端完掘状況(西から)
写真20 SX110完削状況(西から)
写真21 SX110(1号土壠)被出状況(南西から)
写真22 SX110(1号, 2号土壠)完掘状況(北から)
写真23 SD108, 109完掘状況(南から)
写真24 SD109両辺中央上層断面(南から)
写真25 Pit100内銅鏡出土状況
写真26 南壁上層断面A(北から)
写真27 第173次調査全景(西から)
写真28 SE150井筒完掘状況
写真29 出土遺物1
写真30 出土遺物2

I はじめに

1. 調査の経過

平成4年10月、市営高畠住宅建替事業に伴い、福岡市建築局住宅改良課より事業地内の埋蔵文化財の有無について教育委員会埋蔵文化財課へ照会が行なわれた。これを受け当課ではすぐに試掘調査を行ない、遺跡の範囲を確認するとともに発掘調査へ向けての協議を重ねた。

試掘調査や旧地形図等から申請地は尾根線上にあるものの、用途面積約7000m²の半分以上は削平を受け、遺構が消滅していることが判明した。(Ⅱの地形参照)この資料をもとに調査範囲、廃土処理等の方法を詰め、さらに造成工事と調査日程の調整を行なった。この結果、早期に造成が行なわれる外周道路部分の調査を平成4年の1月から3月まで先行して実施し、次年度6月より宅地内調査を再開した。さらに、終盤の10月から東側の取付道路部分を並行して調査した。なお、この取付道路部分の調査は新たに第173次として登録し、本書に掲載している。

2. 調査体制

調査は以下の体制で臨んだ。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾 學 埋蔵文化財第1係長 横山 邦雄

事前審査：文化財主事 井澤 洋一 係員 吉武 学

庶務：埋蔵文化財第1係 吉田 麻由美

調査担当：吉武 学 (平成4年度)

荒牧 宏行 (平成5年度)

調査作業員：(平成5年度)百武 美隆 柴田 常

人 松本 藤子 松井 フユ子 堀

ウメコ 柴田 タツ子 坂田 美佐子

谷崎 峰子 井本 久美子 折口 怜

子 小宮・弘子 中川 恵美 坂井

美穂 黒木 正治 高岡 喜久男 稲

所 通泰 下田謙三 楠木 修一 森

康枝 増本 恵美子 本堀 栄峯

不二夫 門田 実 真田 弘二 野田

由美子 境 寛

整理作業：品川 伊津子 永井 和子 坂井 美

穂 永田 世津子 木下 三奈



調査風景

II 位置と環境

1. 地形

有田遺跡群は最高所が標高15mの中位段丘上に立地した移築群である。周縁は開析を受け、複雑な出入りをみせる。本調査地点は有田遺跡群の中央部を北西へ派生する尾根先端に占め、調査で確認された地山の最大標高は11mである。西側は崖面となり、沖積地との比高差5.2mを測る。北側隣接地の第59次調査地点は本調査地点から比高差1.5mで段落ちし段丘面の可能性も指摘されていたが、後述するように、今回検出された方形区画溝に沿って深さ90cmの段落ちが検出された。

2. 既往調査から

周辺の調査成果を概略記して、歴史的環境を示したい。

南側の第5次調査地点は丘陵西斜面に位置し、かなり削平をうけているが縄文中、後期の貯蔵穴60基、時期不明の木棺墓1基、土壙1基、弥生時代後期の年度採掘坑1基を検出した。ここでは弧状に配列された貯蔵穴に柱痕跡が見いだされ注目された。この貯蔵穴群の延長は第116次で検出され環状に巡ることが予想された。第116次の東側、尾根線上は削平が深いと考えられ遺構が検出されないが西側緩斜面に貯蔵穴31基、古墳時代の竪穴住居2棟が検出された。

北側の調査では第59次、第60次、第150次が行なわれている。第59次では弥生前期～中世迄の土壙41基、弥生前期壁棺墓1基、弥生中期円形住居跡2軒、中世溝状遺構4条、掘立柱建物10棟を検出した。この内、中世溝は今回の第170次調査でも検出された方形区画溝を含む。時期は15世紀初めの年代が考えられている。さらに、地形の項で記した段落ちの地業を15世紀代に、開墾されていく時期を18世紀代とする可能性が指摘されている。第59次調査区北辺の段落ちから隣接した第150次調査では弥生時代の竪穴住居跡1棟、貯蔵穴7基、古墳時代の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟、溝2条を検出した。第59次の東辺の段落ちは溝として確認され延長が検出された。

以上の周辺調査から総じて地形的に尾根線部分の削平は深く、遺構がほとんど見られない。特に第170次調査地点以北では著しい。以南では幅広い時期の遺構が検出され、第59次では縄文晩期土器片が出土している。第59次、第170次調査でも注目される方形区画が築造された中世後半は大内氏進出し、家臣早良群代の大村興影が小田部に知行地を与えられ、大内氏滅亡後は大友氏の家臣小田部氏が安楽平城に居城し、早良群内の支配に当たったが、その里城が有田にあったという。図1の小田部城推定地である。その関連遺構と考えられる空濠が調査で確認されている。



写真1 第170次調査区全景



図1 有田・小田部台地の旧地形図(昭和初期) (1/5000)

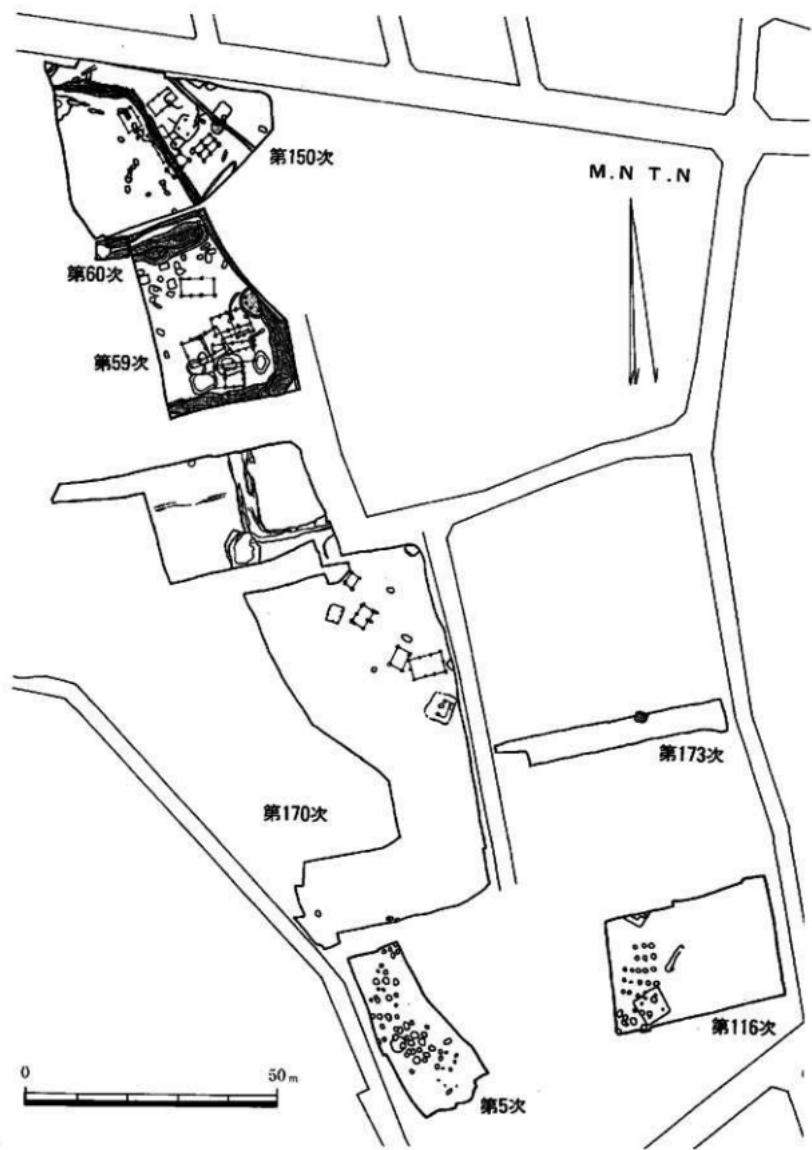


図2 第170次、第173次位置図と既応調査（1／1000）

III 第170次調査の記録

1. 調査の概要

調査地点は標高9.0から11.0mまでの北西に派生した尾根線上に位置する。頂部は削平を受け既に大半の遺構が消滅していた。さらに西側は開折を受けた断崖の地形をなす。従って、調査は東側丘陵斜面と南西端の斜面に限られた。調査面積は2,118m²である。

主な遺構は縄文時代中期（阿高系）の貯蔵穴3期、弥生時代中期の円形窓穴住居1軒、掘立柱建物2基が検出された。窓穴住居の遺存は概して悪く、壁溝のみ検出できた。

上記の遺構のうち、縄文貯蔵穴は南側の第5次、116次に連続し、円形状に分布することが予想される。また、中近世の遺構については、北側の第59次、60次で検出された方形区画溝が規模、方向ともに近似し、区画内に掘立柱建物が検出されている。

2. 調査の方法

Iで先述したように、外周部分と宅地内を分割し、年度をかえて調査した。宅地内の調査では試掘成果から外周から中央部分に向かって表土を重機で剥ぎ取り、遺構が消滅し検出されない部分までを調査区として設定し、残り敷地で廃土処理を行なった。

測量および図面作成に当たっては先行した外周部分の基準に次年度も即した。この基準の方向は現存している宅地区画にはほぼ沿っている。後日、基準杭に国土座標をのせ、座標軸を置き換えた。掲載遺構名、図面については巻頭の凡例を参照されたい。

3. 層序

IIの地形で記したように調査地点は北西に派生していく尾根線とその斜面に位置する。現況は客土により平坦に整地されているが、中央部から以西の稜線部は深く削平され、G.L. -5~40cmの客土直下に鳥糞ロームの下部が堆積する。特に、南側の高さを増す部分と擾乱が著しい。東側の丘陵斜面

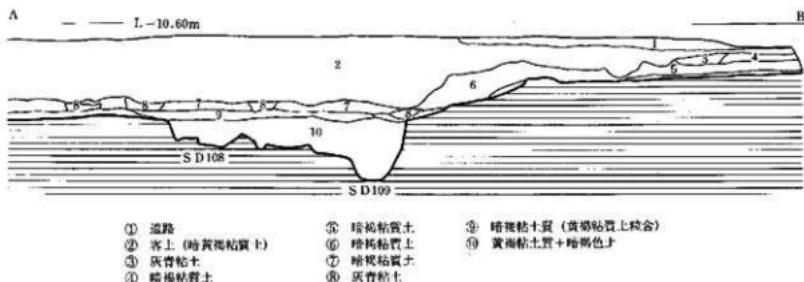


図3 調査区北東部壁面の土層断面 (1/80)

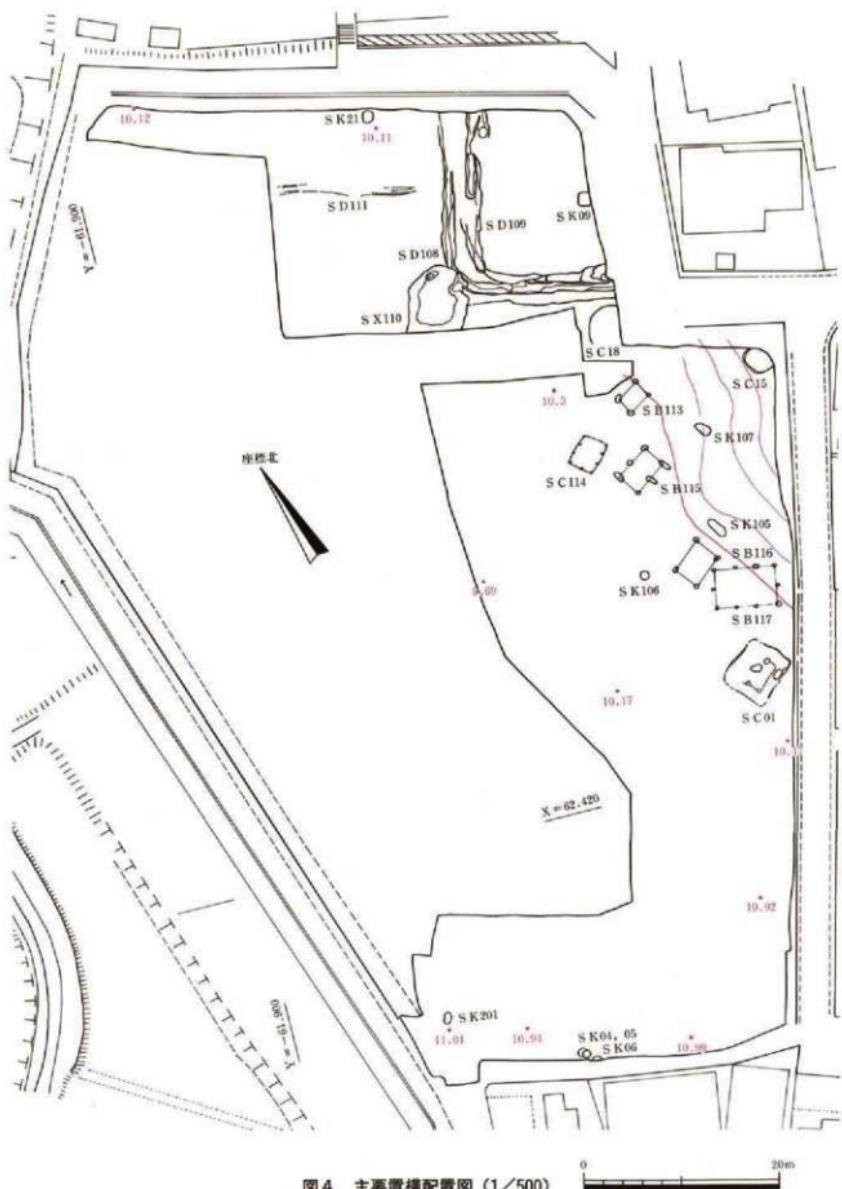


図4 主要置構配置図 (1/500)



写真2 調査区北半部全景（南から）

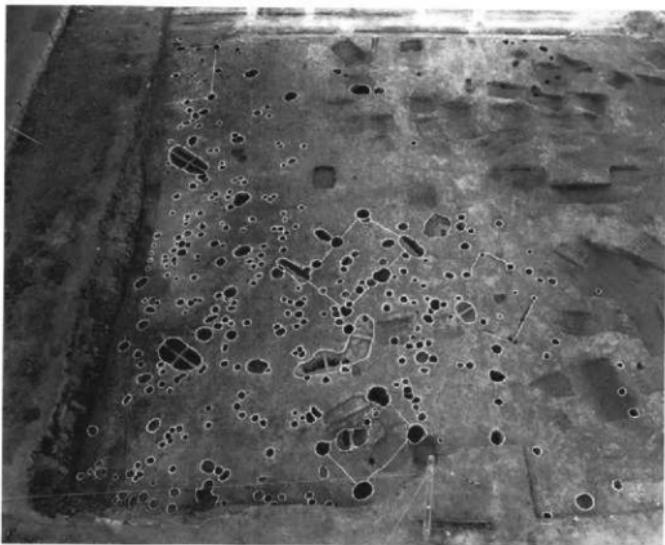


写真3 調査区東斜面完堀状況（北から）



写真4 平成4年度調査全景（西から）



写真5 調査区北東部充堀状況（南西から）

は削平を比較的免れ、図4に示した良好な北東端で層厚25cmの暗褐色土包含層が地山島栖ロームとの間に挟まれている。また、北東部の一画はSD08、09の方形区画を利用し、後世に水田開削が行なわれ、一段下がったテラスの形状を呈している。

4. 遺構と遺物（縄文～弥生時代）

(1) 住居跡

SC01

調査区の東斜面中央で検出された。主軸は斜面の傾斜に合わせた方向にとられている。擾乱が多く不明確な点が多いが、南北5.6m、東西5.1mの方形プランを呈す。壁高は良好な部分で8cm。壁溝が幅20cm、深さ5cm程度で断続的に巡る。ベッド状の高まりが、コの字形に幅約1m、高さ5cmで検出された。堅穴のほぼ中央に不整形の炉跡と考えられる複数がある。底面は起伏が大きい。焼土が周辺まで分布する。炉跡を中心に対向し、2の主柱穴が検出された。P1は深さ25～30cm、P2もほぼ等しい。柱穴はそれぞれ2個が切り合っているため、建て替えの可能性がある。東辺際に長軸1mの不整形土壙P3が検出された。周囲および中からは石と混じて、砥石、鉄器、鐵滓が出土した。

中央部からP3にかけては、鉄器片5点、鐵滓（長軸5cm以内）6点、羽口小片が7点出土し、鍛冶が行なわれていた可能性がある。

遺物

出土土器量はコンテナ1箱弱である。P1、P2および中央炉周辺に集中する。1は復元口径20.4cmを測る二重口縁壺である。器面があげて調整

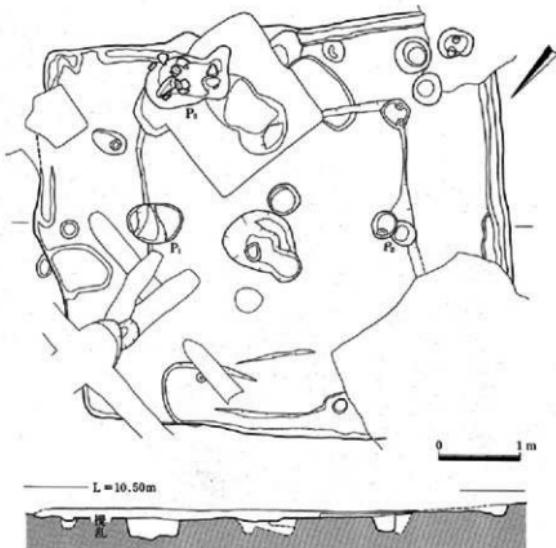


図5 SC01実測図 (1/60)

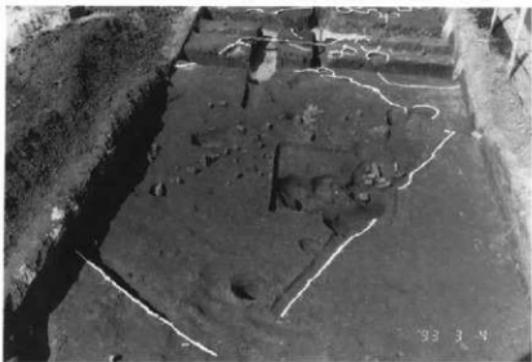


写真6 SC01実測図 (南西から)

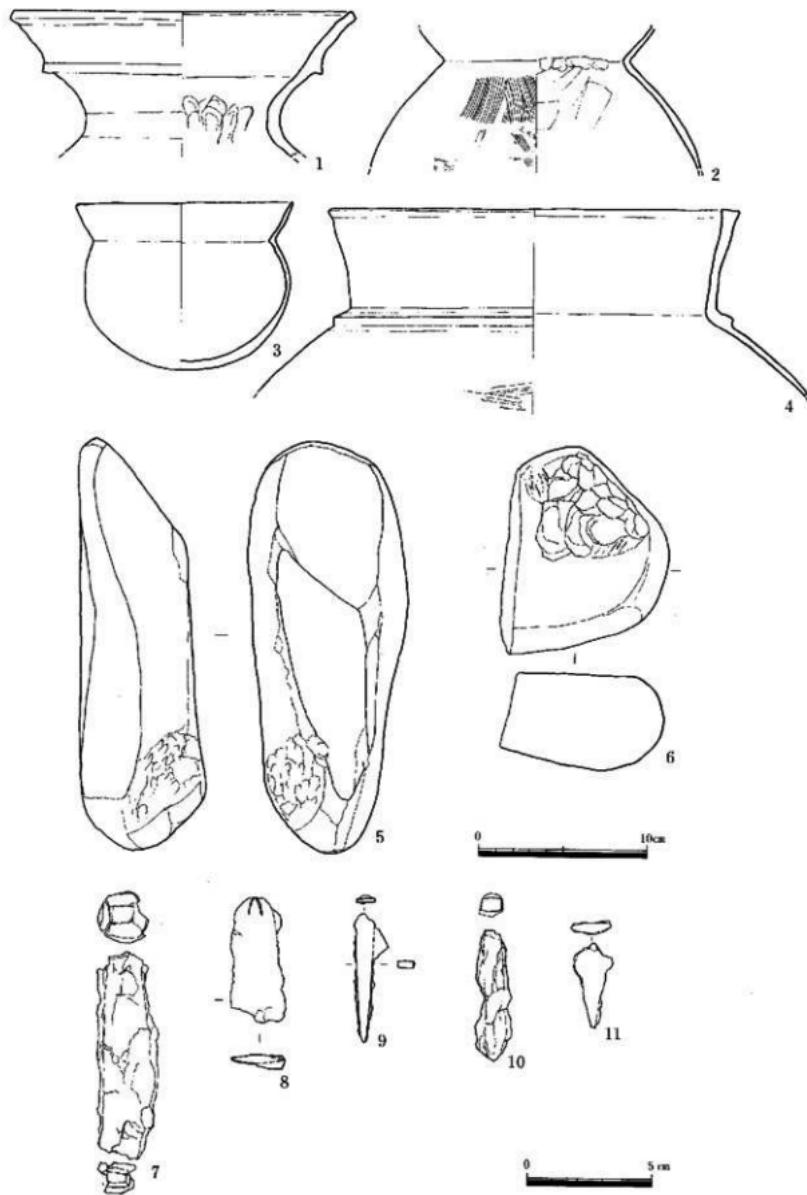


図6 SC01出土遺物実測図 (1~6 1/3, 7~11 1/2)

が不明であるが、頸部内面に強い指頭痕が残る。2の壺は欠損しているが口縁端部はつまみ上げと考えられる。胴部外面に細かいハケ目が施される。内面は頸部に指頭痕がみられ、以下ヘラケズリが施す。3の小形丸底壺はほぼ完形である。口径12.8cm、器高9.8cmを測る。口縁から胴部下位までの黒斑が1箇所見られる。

4は復元口径24.3cmを測る直口の壺である。口縁端部は水平面をなす。頸部付根に断面三角形の突帯がつく。調整は不明瞭であるが、胴部外面に細かいタタキがみられる。灰白色を呈し、粗い砂粒を多く含む。5は砂岩製の砥石である。 P_3 から出土し、他に同じ石材の砥石が2点出土している。側面は全周よく研ぎ込まれ、凹レンズ状をなすが、図上、下端の一部がアバタ状にあれている。また、下端部は火熱を受け赤変している。6の磨石も P_3 内から出土した。図上面に敲打による大きな剥離がみられる。左側面は直線的な平坦面をなし、磨かれている。7の鉄器も P_3 から出土した。断面方形の芯金(軟鉄)に皮金(硬鉄)が取り巻き合わされ鍛えられている。その形状は鶴の為不明確であるが、方形に近いが丸みをもつ。芯金は図上下端の断面で薄く小さくなり、おそらく器形全体も細くなっていくと思われる。ノミ状の工具の可能性がある。

8は埋土中から出土した鎌身部や丸ノミ状の工具が考えられる鉄器である。9は

P_3 、10は埋土中から出土した鎌等の基部と考えられる鉄器である。11は中央炉近くで出土した鎌身部か。SC18

北東部の調査区際で検出された。残りが悪く壁高5cm程度である。円形プランをなすと考えられ、深さ4cmの壁溝が1/4周検出された。中央に炉跡と考えられる円形のPitが検出され、主柱穴の P_1 ～ P_6 が想定される。主柱穴の深さは P_1 が43cm、 P_2 が57cm、 P_3 が53cm、 P_4 が46cm、 P_5 が65cm、 P_6 が63cmである。その配置から径5.3mの円形窓穴が復元される。床面のレベルは北東側へ低くなり、比高差は10cmを測るが、地形によったものか。

出土遺物は柱穴から小片4点のみで明確な時期は決めがたい。本調査では円形窓穴住居跡はこの1軒のみであるが、多数、削平され消滅したものと思われる。

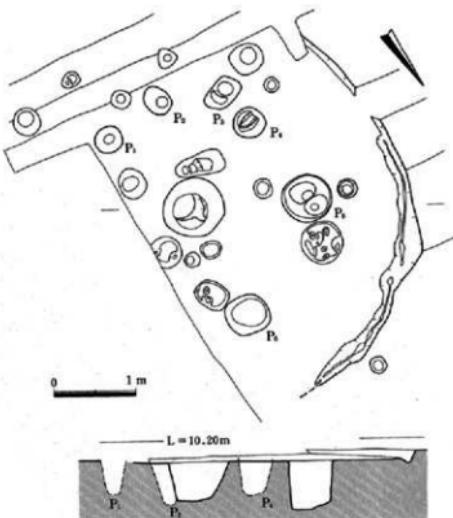


図7 SC18実測図 (1/60)



写真7 SC18発堀状況（西から）

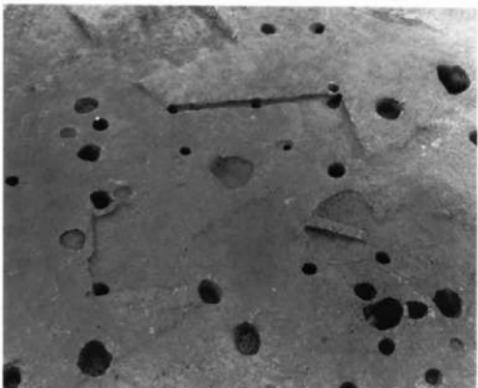


写真8 SC114発堀状況（南東から）

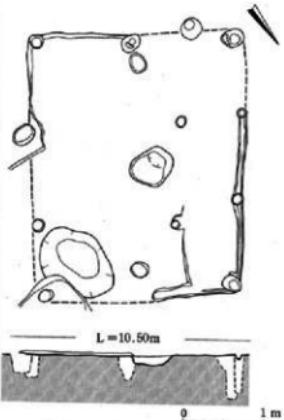


図8 SC114実測図（1/60）

SC114

調査区北側の中央部で検出された。遺存が悪く、壁溝と壁が一部検出されたのみであるが、壁際に小柱穴が巡る。復元豊穴は短辺2.5m、長辺3.2mの長方形プランをなす。北東コーナーの土壌は検出床面からの深さ5cm、中央のPitは10cmで、住居跡に伴うものか不明である。壁際の柱穴は径30cm、深さ26~48cmを測る。

出土遺物は柱穴から小片少量のみで、時期は決めがたいが、地形にあわせた主軸方位から中世を遡るものと考えられる。

SC15

北東部の調査区際で検出された。遺存が悪く、南辺の壁溝のみ検出できた。プランは隅丸方形が想定されるが、南辺はややカーブを描く。南辺長2.8m、壁溝は幅25cm、深さ10cmを測る。主柱穴は不明であるが、中央に深さ36cmのPitが検出された。

出土遺物は弥生土器小片が極少量出土したのみである。

その他

上述のように検出された住居跡はきわめて遺存が悪く、消滅したものも多いと確定できる。ここでは個別には図示しないが、主軸方位、プランからその可能性があるものを取り上げた。

SK99

調査区東壁際の中央部で検出された。不確定であるが、短辺1.9mの長方形プランが想定できる。深さ12cm、壁溝は検出されない。

SK13

SK99の南側に近接して検出された。擾乱が著しくコーナーの形状のみ検出された。SK99と同方向の主軸をとる方形プランと考えられる。壁高10cmが遺存する。壁溝は検出されない。

出土遺物は弥生土器片が少量である。

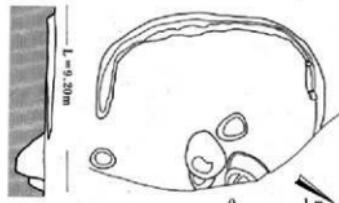


図9 SC015実測図（1/60）

(2) 土壌

住居跡と同様、擾乱が多く、形状が不明確なものが多い。数多くの土壌状の遺構があったと思われるが、ここでは比較的、遺存が良好なものを説明する。

概ね、調査区南際に縄文時代の土壌、北東部に弥生時代中期の土壌、貯蔵穴が検出された。前者は、第5次、第116次で検出された貯蔵穴の可能性がある土壌群が環状に配列した延長である。

SK04

調査区の南際中央で、SK05と切り合って検出された。長軸長100cm、短軸長80cmの橢円形プランを呈す。東側の立ち上がりは擾乱で上

部が切られている。底面に径28cm

を測る円形の堀込みが認められた。

その埋土は地山の黄褐色粘土粒を含む暗褐色土である。検出面から深さは最下までが175cm、テラス状の底面までが95cmを測る。

出土遺物は図示外に縄文粗製深鉢の小片が8点出土したのみである。12は阿高系の口縁部で端部が欠損するが、わずかに波状の部分がみられる。横線下に曲線の回線を施す。赤褐色を呈し、硬質。

SK05

SK04に切られ、さらに擾乱によつて上部が削平されている。検出面からの深さは最下で60cmを測り、底面は起伏が大きい。

出土遺物は小片が2点出土したのみで、阿高系の底部を含む。

SK06

SK04、05と近接し、半分が調査

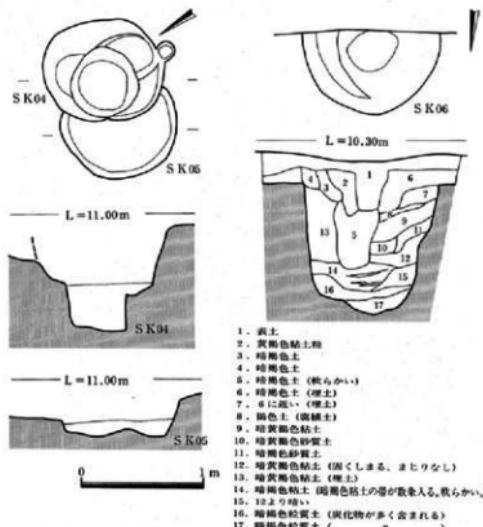


図10 SK04-06実測図 (1/40)



写真9 SK04、05発掘状況（西から）



写真10 SK06土層断面（北から）



写真11 SK04~06出土遺物

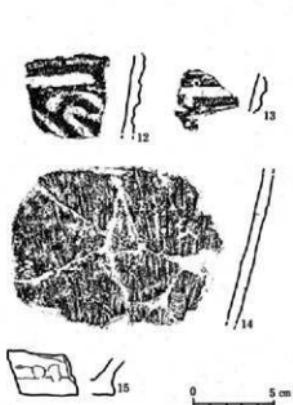


図11 SK04~06出土遺物実測図(1/3)

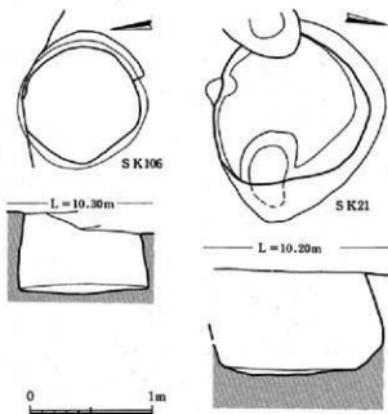


図12 SK106、21実測図(1/40)

区外である。確認できた範囲では径115cmの円形プランである。検出面からの深さは120cmを測る。図示した6、7、13層の埋土をきって径30cmの柱状の堆積を示す5層が確認された。この5層の下部には軟質の、暗褐色粘土が数条、互層にみられる14層、さらに下層に腐植土の10、17層堆積する。下底には径40cm、深さ13cmの17層が堆積する崖みがみられる。

13は阿高系で横線と押点がみられる。14の粗製深鉢片は外面に右下がりの条痕、内面ナデ調整を施す。15は粗製の底部である。16の磨石は両面凹み側縁も磨かれている。砂岩製か。17の磨製石斧は器長14.1cm、刃部幅5.1cmを測る。刃部と基端に敲打、剥離痕がある。

SK106

調査区の中央部で検出され、径97cmの正円に近いプランを呈す。壁の立ち上がりはややオーバーハ

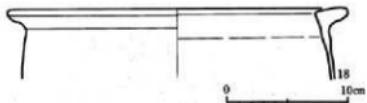


図14 SK107出土遺物実測図(1/40)

シングし、上部は攪乱によりカットされてい
る。底面は径107cmを測り、地山は鉄分の沈
着と還元した黒灰色土を含む明黄灰砂質土
である。深さ67cmを測り、埋土は土層区分
が困難な灰色が強い暗灰褐色土でブロック
状にローム下部の黄色灰色砂土を含む。

出土遺物は弥生中期の土器片が若干出土
した。

SK21

調査区北端中央部で検出された。径120cm
の円形プランを呈し、下底は広がる。深さ
80cmが遺存し、壁は下位で膨らみ、オーバー
ハンギングする。形状から弥生中期の貯蔵穴と
も考えられるが、出土遺物は小片2点、中
世の土師器壊片のみが出土した。

SK107

調査区北東部で検出された長軸長178cm、
短軸長100cmを測る楕円形プランを呈す。底
面に不整形の凹みがあり、西側に一段高い
テラスを設ける。最下面までの深さは155cm
を測る。壁の立ち上がりは全周、ややオーバー
ハンギングしている。埋土は均質な黒味が
強い黒褐色土で分層が困難であった。

出土遺物は弥生中期の土器片が少量出土
したほかナイフ形石器が1点含まれていた。
図示した18は中期の甕片である。



写真12 SK106完掘状況（南から）

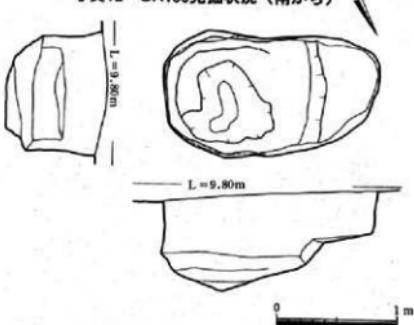


図13 SK107実測図(1/40)

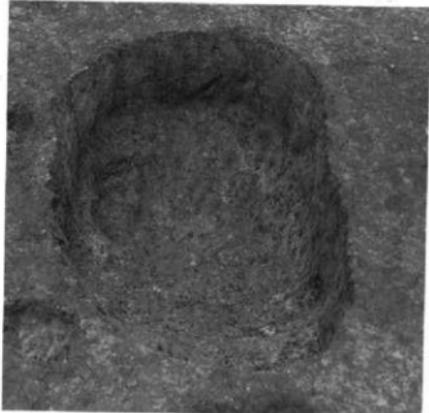


写真13 SK107完掘状況（北西から）

SK105

調査区の北東部で検出された。検出面で長軸長235cm、短軸長90cmを測り、短辺が弧形を描く方形に近いプランを呈す下底では長軸長167cm、東辺40cm、西辺30cmで短辺は直線的である。底面は平坦で東側の最下面では深さ35cmを測り、西側へ緩やかに高くなる。壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は弥生中期の土器片、石斧片、黒曜石のチップが少量出土した。

SK201

調査区の南西際で検出された。長軸長124cm、短軸長80cmの方形プランを呈す。深さ45cmを測り、壁の立ち上がりは直に近い。底面は北際が少し凹み、中央部に小ピットが9箇所に検出された。陥し穴状遺構と考えられ、地形的には西側の開析された丘陵崖面近くに配置されている。また南東側には阿高系の土器を含む土壤群が検出されている。

Pit 2

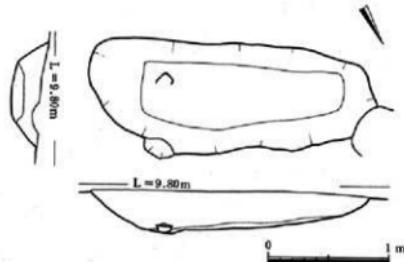


図15 SK105実測図 (1/40)



写真14 SK105実掘状況（南西から）



写真15 SK201実掘状況（西から）

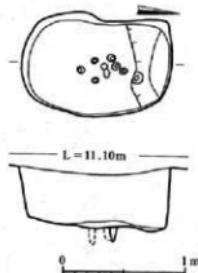


図16 SK201実測図 (1/40)



写真16 Pit 2 実掘状況（南から）

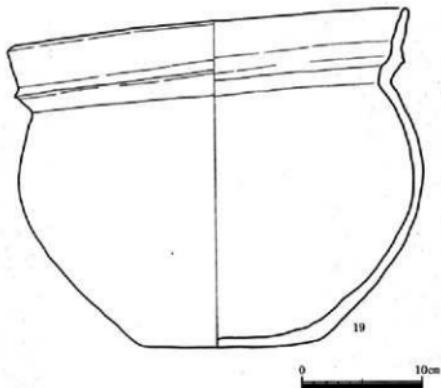


図18 Pit 2 出土土器実測図 (1/4)

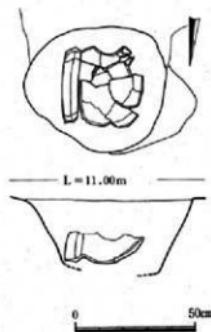


図17 Pit 2 実測図 (1/20)

調査区南端中央で検出された。二重口縁壺をほぼ水平に埋置したピットである。周辺の削平が著しく、多くの遺構が消滅していることを考慮すれば、ある程度深いピットであったと考えられる。

出土土器の19は口径33.4cm、器高27cmを測る。胸部は球形に張り出し、底部はわずかに丸みをもつ。器面が剥落し調整が不明瞭であるが、ハケ目はナデ消されている可能性がある。内面の器面は溶融した剥落が見られる。白色の大きめの砂粒を多く含む。SC01に近い時期と思われる。

Pit20

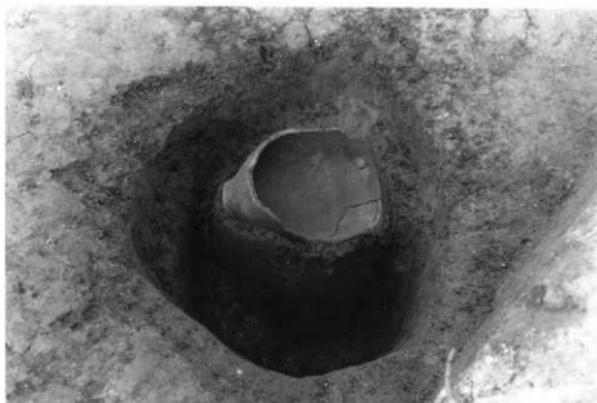


写真17 Pit20実掘状況（南西から）

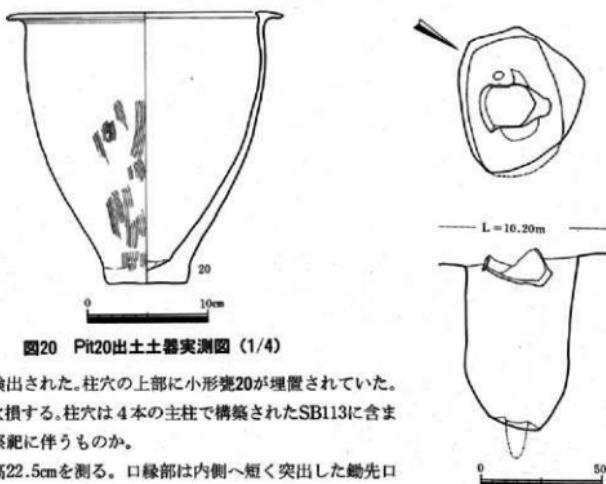


図20 Pit20出土土器実測図（1/4）

調査区の北東部で検出された。柱穴の上部に小形甕20が埋置されていた。甕の上部は削平され欠損する。柱穴は4本の主柱で構築されたSB113に含まれる。甕は地鎮等の祭祀に伴うものか。

20は口径23cm、器高22.5cmを測る。口縁部は内側へ短く突出した鋸先口縁をなし、底部は平底である。

図19 Pit20実測図（1/20）

(3)掘立柱建物跡

柱穴は比較的遺存が良好な北東部の斜面に数多く検出されたが、木の根、風倒木等、明確な掘り方を持たない自然的なものも幾分含まれる。掘立柱建物跡は堅穴住居と同じく地形に合わせた北東に主軸方向をとる。

SB115

調査区の北東部で検出された 1×2 間の掘立柱である。梁行2.6m、桁行3.9mを測る。 P_3 、 P_5 、 P_6 は布堀り状の細長い掘方が検出された。 P_5 、 P_6 は他の柱穴と切り合って拡大しているものと思われ、本来長軸長120cm、短軸長50cmを測る。深さはほぼ同じである。

出土遺物は P_1 より若干の弥生土器片が出土したのみである。

SB113

調査区の北東部で検出された 1×1 間の掘立柱建物跡である。梁行1.9m、桁行2.4mを測る。Pit20前項で説明した弥生中期の甕を埋置したものである。出土遺物は P_1 より弥生後期の口縁部を含む若干の土器が出土したのみである。

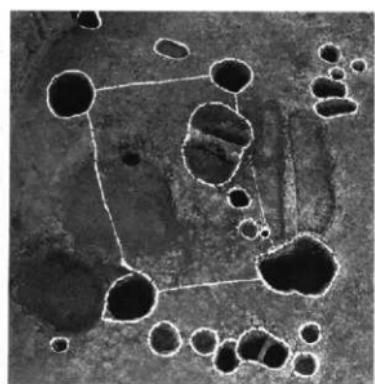


写真18 SB113完掘状況（南西から）

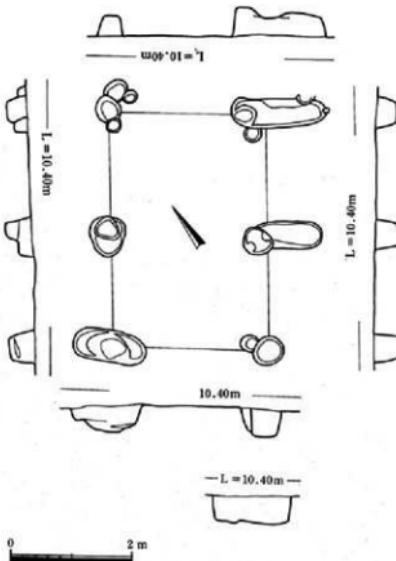


図21 SB115実測図（1/80）

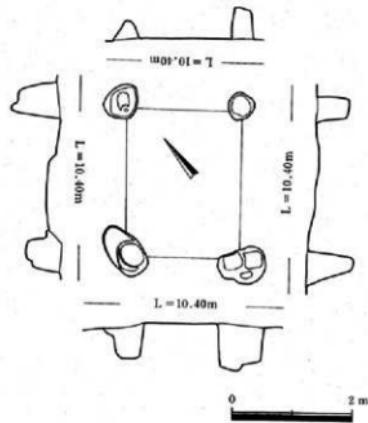


図22 SB113実測図（1/80）

SB116

調査区の北東部で検出された。梁行2.8m、桁行3.6mを測る 1×1 間の建物である。主軸方位は他のこの掘立柱同様北東方向に向く。

P₃、P₄は地形的に高所を占めるためか下底のレベルが上がる。P₂の小柱穴は間柱の位置に検出されたが、対面には削平の為か無い。P₅の深い柱穴は柱筋から外れている。

出土遺物はP₁に若干あるのみ。

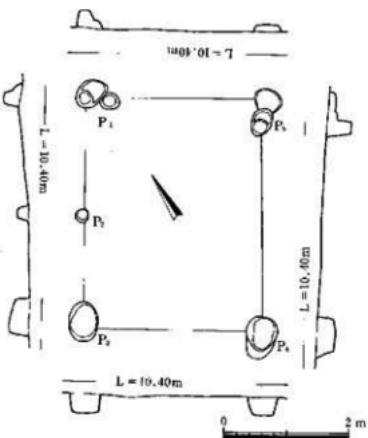


図23 SB116実測図 (1/80)

5. 遺構と遺物（中世以降）

今回の調査で検出された遺構の多くは前項の弥生時代と中世から近世にかけての時期である。検出された主な遺構は掘立柱建物1棟、方形区画溝2条、火葬場（墓）1基、土壙3基等である。この他、掘立柱跡の可能性がある柱筋、土壙の一部があるが、擾乱や削平が著しく確定できない。

遺構の分布は地形が比較的残る北部から北東部にかけて見られ、南側では削平のためか検出されない。

SB110

調査区北側で検出された。長軸長7m以上、短軸長6mの楕円形プランを呈す。南側は作業運搬道路として使用するため未掘となった。崩落によるものが西側に張りだした上端は比高差40cmで2段目の落ちに続く。主軸方向は真北に近く、中世～近世の遺構方位と近似する。下底までの深さは135cmを測り平坦面をみす。北端に楕円形の緩やかな落ちを検出した。北東部の上端、下端に曲折がみられ、別の堀方があったものと考えられる。

下底知覚に河原石の集石がみられた。北側に多く見られ、南半の周縁にはみられない。また石レベルは南側中央部へ緩やかに下降している。これらの状況から、北側から3回以上連続して掘直し、拡大したものと考えられる。石は北側での掘削後に入れられたものか。集石中には五輪塔3個、馬齒が含まれていた。

中央部西寄りの下底で2基の焼土壙が検出された。いずれも木炭を多く含む埋土である。

1号土壙

長軸長84cm、短軸長50cmを測る隅丸の方形プランを呈す。下底は中央部に低くなり、深さ17cmを測る。壁はなだらかな立ち上がりで南側が特に焼けている。壙土の下層には形状を残す木炭が多く、下部は生焼けの茶色のものもある。下底に接して石が落としこまれる。



写真19 調査区北端完掘状況（西から）



写真20 SX110完掘状況（西から）



图24 SX110实测图 (1/80)

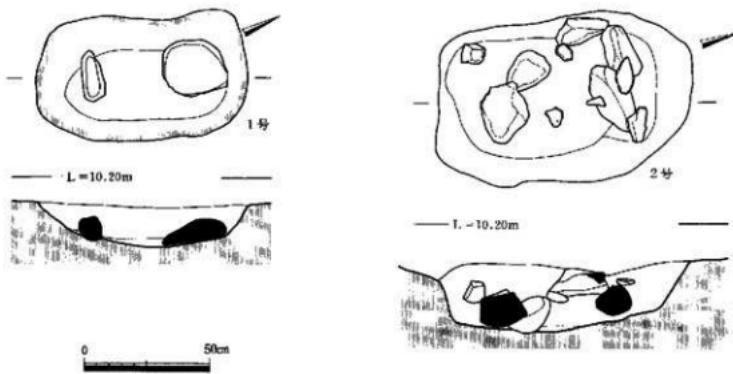


图25 SX110内 1号、2号土壤实测图 (1/20)



写真21 SX110（1号土壤）検出状況（南西から）



写真22 SX110（1号、2号土壤）完掘状況（北から）

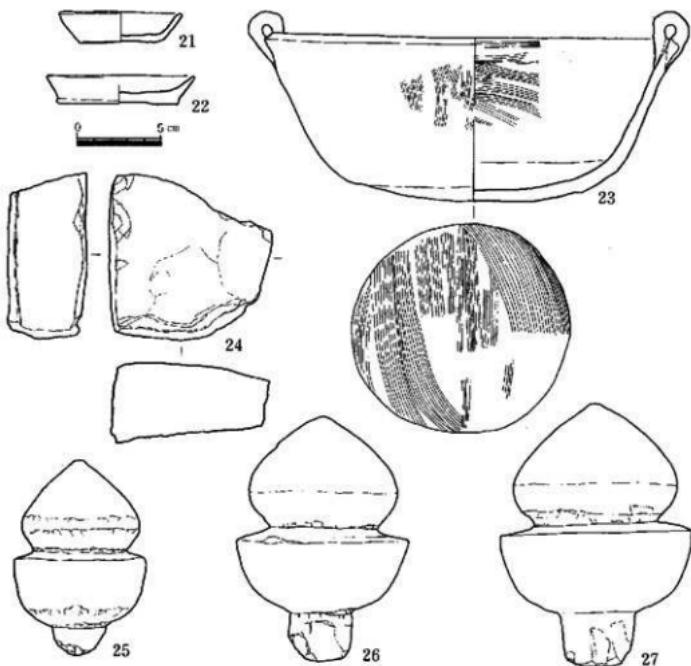


図26 SX110出土遺物実測図 (21、22 1/3、23~27 1/4)

0 10cm

2号土壤

1号の西側、壁際で検出された。長軸長100cm、短軸長63cmを測る。深さは最下で25cmを測り、底面は北側にやや高く、壁もなだらかな立ち上がりをなす。埋土に下層に焼土、灰を多く含み、南側には人骨片を含む。土壇内に上部から石が落ち込む。

上記の状況からSX110は火葬場としての性格が明らかであるが、下底の2基の土壇が墓壙の可能性もあるが、壁の立ち上がりから骨が挿きだされたものと思われる。

出土遺物

図示外に瓦質足鍋、染付等小片がある。21、22は上師皿の完形品である。21は盃であるが、口径7.2cm、22は口径8.7cmを測り底部が厚く、胎土はきめ細かい。23の土鍋は口径32.5cm、器高13.0cmを測る。内面のヨコハケは下位でナデ消されている。外面体部はタテハケを施し、底部には煤が無く、ハケメが良好に残る。内面灰色。外面体部の大半に煤が付着するが、黄褐色を露呈している部分が見られ、底部は赤褐色を呈す。24は図示した平面図に一面のみ磨かれ、側面の左側縁にノミ状の工具により切り込んだ痕跡が見られる。安山岩製。25~27の五輪塔は集石とともに出土した。法量は3者ともに異なるが、形状は近似する。空輪の尖りは不明瞭で、風輪基部は丸みをもって移行する。砂岩製。



写真23 SD108、109完掘状況（南から）



写真24 SD109西辺中央土層断面（南から）

SD109

調査区の北東端で検出された方形区画溝である。開削された段落ち下に平行して走行する。西辺北側では削平のため不明瞭となり、SD108との間にPitが検出されたが形状から木の根と思われる。幅は約1.0m、西辺の一帯でやや広がる。南辺側で、段落ちと80cmの比高差で上端が検出され、底面までの深さは17cmを測る。西辺側では段落ち上端のレベルが北側へ下降し、南辺側は最大で50cmを測る。同様にSD109も緩やかに下降し北際で20cmの比高差を測り、上記のように不明瞭となり消滅する。

埋土は灰褐色を呈し、極めて新しいものと思われた。土層は図3に示す。

段落ちは溝掘削後、少なくとも内側のSD108掘削後拡大して、区画沿いに開削されたものと考えられる。埋土上部は現代の客土が含まれる。

出土遺物は瓦質の摺鉢、陶器、鍋の耳部、染付けの小片が少量である。近世以降の所産であるが、SD109の区画に沿って開削された時期のものも含む可能性がある。

SD108

SD109の内側をほぼ平行して走行する。南辺側ではSD109に接し、一部切られている。西辺ではやや離れていく。南辺で幅45~80cm、深さ7~50cmを測り西側へ幅、深さとも増す。西辺では幅広くなり145cmを測るが、北側ではSD108同様不明瞭となる。底面で起伏が大きく、深さ15~70cmを測る。

出土遺物は図示外に玉縁白磁、青磁、須恵器の小片が少量ある。28は土師皿は口径8.3cmを測る。29は瓦器鉢、30は土製で両側縁をへらで切る。把手か。

方形区画

区画内では柱穴が検出されたが、その多くは掘方が不明瞭で、木の根状のものである。区画に合わせた柱筋があるが、完全な建物跡に復元できない。開削時の削平によるものと思われる。

SB117

調査区の北東部で検出された2×3間の掘立柱建物跡である。東西棟で梁行4.1m、桁行6.0mを測る柱間約2.1mを測る整然とした配置で、梁行の間柱は外側へ張り出る。深さは地形に沿って、北東部へ低くなる。

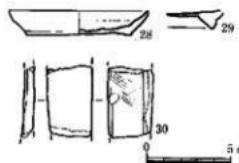


図27 SD108出土遺物実測図 (1/3)

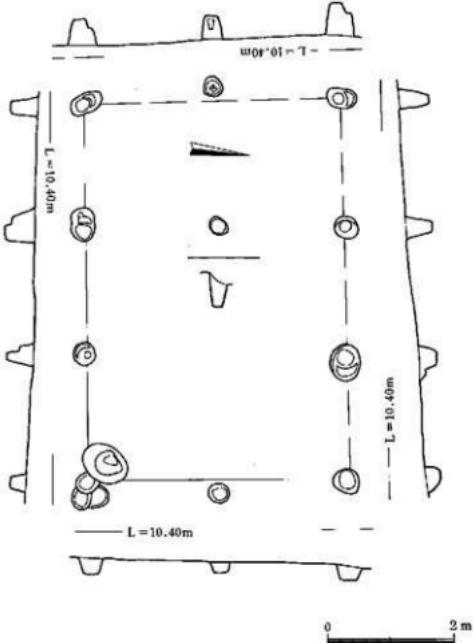


図28 SB117実測図 (1/80)

Pit100

北東部の調査区際で検出された。方形区画内に位置する径30cm、深さ25cmの柱穴状のPitである。上面から計19枚の銅錢が出土した。その内訳は31～34の4枚が開元通寶(621)、35が淳化元寶(990)、36が皇宋通寶(1037)、37が嘉祐通寶(1056)、38～41の4枚が熙寧元寶(1068)、42が元祐通寶(1086)、43が政和通寶(1111)、44が政和通寶(1368)、45～47の3枚が永樂通寶(1408)である。



写真25 Pit100内銅錢出土状況

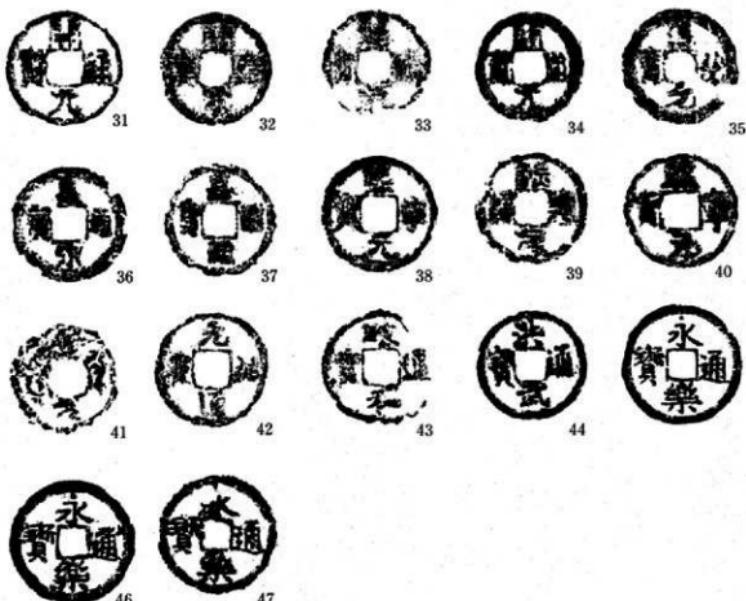


図29 Pit100出土銅錢拓影(1/1)

SK09

調査区北東端で検出された。方形区画内に位置し主軸方位もほぼ同じである。東側の一部は調査区外で不明であるが、1辺1.4mの正方形に近いプランと考えられる。深さは40cmが遺存し、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は土師器皿と壺が少量出土した。**48**の土師皿小片、**49**は体部中央に凹みをもち、底部との堀は鋭い。外底部にハケメが残る。**50**の土師器壺は口径12.2cm、器高3.1cmを測る。

SK17

調査区北東際で検出された。方形区画内で主軸を区画とほぼ同じにする。長軸長1.15m、短軸長0.9mを測る方形プランを呈す。深さ50cmを測り、底面は半壺である。出土遺物は土師器の小片が3点出土したのみ。

SD111

調査区北部中央を東西に走行する。幌乱で断続的になっているが、延長14mまでを検出した。幅70cm、深さ10cmを測り、底面のレベルは変わらない。出土遺物は無い。

SX110出土石斧

51は中世のSX110に混入した打製石斧である。器長10.5cm、刃部幅8.7cmを測る。片面に自然面を残す。

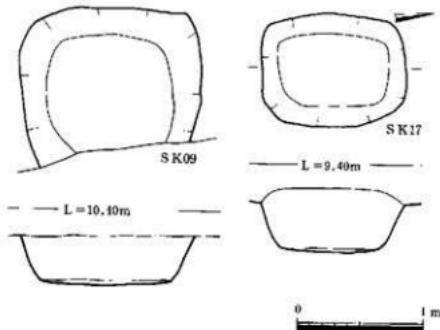


図30 SK09、17実測図 (1/40)

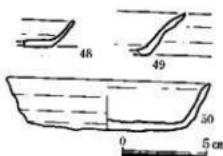


図31 SK09出土遺物実測図 (1/3)

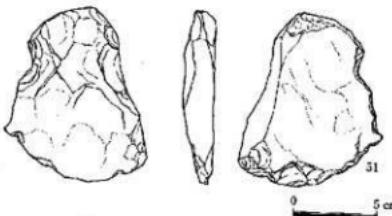


図32 SX110出土石斧 (1/3)

IV 第173次調査の記録

1 調査区の位置

Iで先述したように、第173次は高畠市営住宅地（第170次調査地点）への仮設侵入道路部分の調査である。第170次調査区の東縁中央から東へ延長48m、幅7mの調査区が設定された。道路予定地はさらに、第173次調査区の東端から南に折れ、既設道路の拡幅を行なう。この南北延長部分については、幅が狭く現状では調査不可能であることから周辺の試掘等の結果から造構が密度薄いと判断され調査区から除外された。

2 調査の概要

中世前半の井戸1基と柱穴を多数検出した。表土、柱穴から繩文

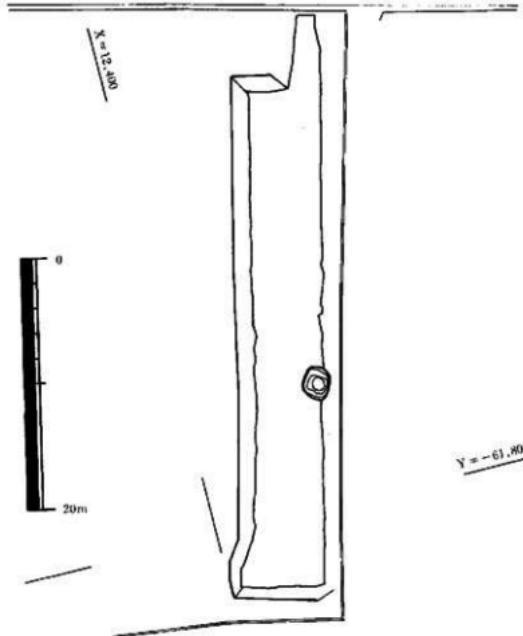


図33 第173次調査地点位置図 (1/400)

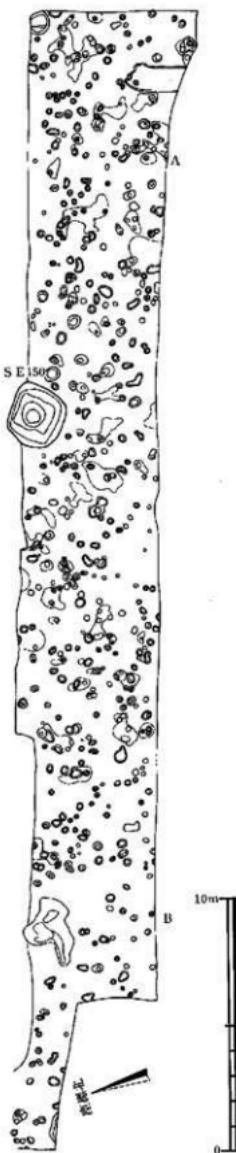


図34 第173次全体図 (1/200)



写真26 南壁土層断面A（北から）

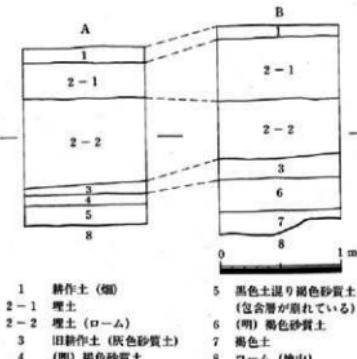


図35 調査区南壁土層断面 (1/40)



写真27 第173次調査全景（西から）

中期以降の土器、石器、古墳時代後期の須恵器、中世の土師器、瓦器が出土するため柱穴には幅広い時期のものを含むと考えられる。

出土遺物は総量でコンテナ2箱分である。

3 土層

現況の南側畠地は約1mの客土により地上げされ、北側にのり面をついた土塹を築く。その為、調査においても崩壊を防ぐ為のり面を築く必要があり、調査範囲も幾分狭くなった。

南側畠地のGLは12.2mを測り、客土下に以前の耕作土、さらに下層に黒褐色から褐色の包含層が1層堆積し、地山のロームになる。地山の標高は10.70～10.80mで、わずかに東へ下降する。従って、削平がとくに西側に深く行なわれているものと思われる。

4 遺構

柱穴以外の主な遺構は井戸1基のみであった。

SE150

調査区の北辺中央で検出された。軸長210cmの隅丸方形プランを呈し、検出面から深さ130cm下で短



写真28 SE150井筒完掘状況

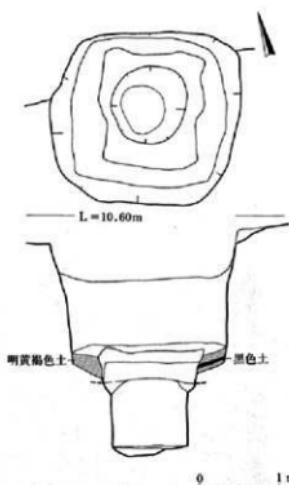


図36 SE150実測図 (1/60)

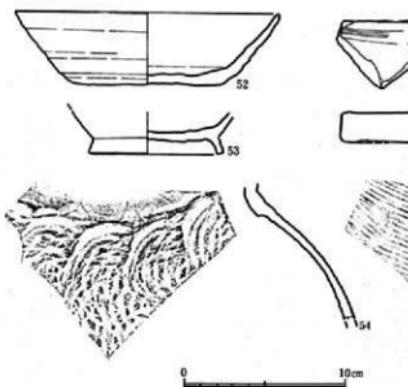


図37 SE150出土遺物実測図 (1/3)

辺120cm、長辺140cmの方形の井側の痕跡を土色の違いから検出した。さらに20cm下から径90cmの円形井筒の掘方が確認され、深さ90cmを直に掘削する。出土遺物52は土師器壺で底部ヘラ切り、53の土師器壺の高台は直線的に外方へ延びる。54は須恵器甕、55の瓦片凹面の布目を切ってハケメが見られる。凸面縄目。

検出面出土石斧

56は遺構検出時に出土した分銅形をなす打製石斧である。器長12.5cm、刃部幅6.0cm。

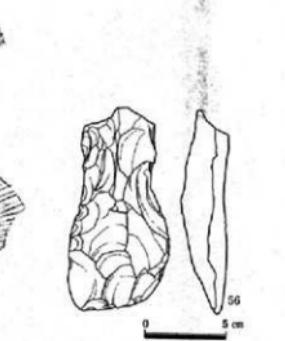


図38 検出時出土遺物実測図 (1/3)

V 小 結

遺構の時期と性格

ここでは検出された主な遺構の時期と性格を既往調査ともに照合させ、結びとしたい。既往調査についてはⅡで既略を記しておいた。遺構配置については全体図(付図)とともに図4を参照されたい。

縄文時代中期の阿高系の時期にSK04～06が構築されている。第5次、第116次の貯蔵穴の延長と考えられ、尾根線上に環状に配列された北跡が確認されたことになる。予想されたように東西(外縁径約60m)に長い円形を描く配置である。SK06からは標木の可能性が考察された柱痕跡が検出されている。南西隅の崖縁近くに陥れ穴状遺構SK201が検出されているが近い時期の可能性がある。

弥生時代では中期中葉のSK07が検出された。円形住居跡SC18、Pit20、SK106が近時期の遺構と考えられ、北側の第59次までこの時期の集落が広がることが確認された。なお第59次で出土した前期末から中期前半の甕棺は第170次、北側の第150次とともに検出していない。終結するものか削平により消滅したのか判然としない。

古墳時代では布留式の古いタイプの住居跡SC01が検出された。削平により明確な時期が決められない住居跡が多い中、貴重であるとともに、鍛冶が行なわれていたことを示す鉄滓や、鉄器は注目される。同時期にPit2があるが、甕棺の可能性がある。

古墳時代後期では柱穴等に出土遺物をみると、削平のためか確実な竪穴住居等は検出されていない。なお、北側の第150次では溝等が検出されている。

掘立柱建物跡のSB113、115、116は竪穴住居跡と同様、主軸を地形に合わせた北東方向に向ける。弥生時代中期から古墳時代までのものと考えられる。

古代末から中世にかけては第173次で検出されたSE150がある。9世紀代と考えられる。

中世では後半期の遺物が目立つ。方形区画の溝SD109が走行している。切り合い関係からもSD109が新しい。出土遺物が少なく時期の確定が難しいが周辺の状況や第59次で検出された溝の時期等から15世紀代に方形区画溝が掘削され、その後、近世近代に削削、閉塞されていると考えられる。SD109からは近世以降の遺物が含まれ、埋土も新しい印象をうけた。後世の開削により拡張された溝の可能性がある。方形区画内のPit100から出土した銅錢、永樂通寶は方形区画溝が築かれた時期を示すものと思われる。SX110が火葬場であることはIVの個別説明で先述したが、その時期は15～16世紀以降に置けると思われる。しかし、その性格から方形区画(館)と同時期とは考えにくくての機能が終えた後に上地利用されたものと考えたい。Ⅱで記したように15、16世紀の小田部は早良郡代の直接の影響下にあり、既往調査においても館を連想させる方形区画溝等の施設がみられ、遺物量も多くなる。

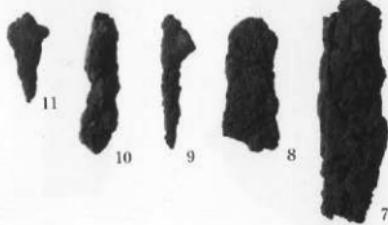
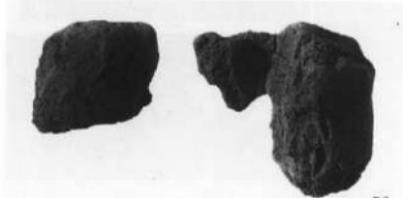
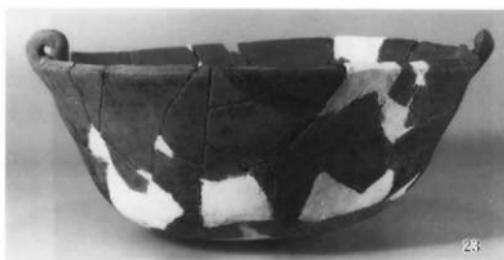


写真29 出土遺物1（1、3、4、7～11、56（羽口）はSC01、20はpit20、61は柱穴出）



28



57



58



22

23



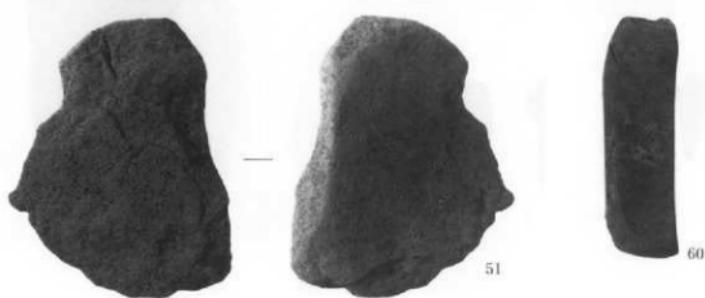
27



59



52



51



60

写真30 出土遺物2 (21~23、27はS X 110、51は検出時 52は第173次 S E 150、57~60は柱穴出土)

有田・小田部

第26集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集

1996年（平成8年）3月29日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
電話（092）711-4667

印 刷 株式会社博多印刷
福岡市博多区須崎町8番5号
電話（092）281-0041

